

都市集住様式の歴史的研究 III

近世城下町の住宅—萩市の場合—

石井 昭 羽生修二
一色史彦 石井邦彦
南 直行
山田幸正
宮田 浩

研究前史

我々の研究室には、今回の研究テーマを採り上げる以前に、次の研究実績がある。

1) 東京都立大学都市研究組織委員会都市史部門研究班の一事業として、1972～73年度にかけて実施した調査研究。その成果が「都市の歴史的環境とその保存策に関する調査研究—萩市の場合—」（都市研究報告50, 1975）である。その一環として武士住宅・町屋数棟の平面図・立面図を作成した。

2) 文化庁による「伝統的建造物群保存地区保存対策調査」のケーススタディとして高山・倉敷・萩が選ばれ、そのうちの萩の調査を担当した。調査対象地区は、堀内地区全域とした。ここは近世末期までは、萩城下の中でとくに重臣の大邸宅が建ち並んでいた地区であるが、明治初期までには大半の主屋が破壊され、現在では土塀と夏密柑の景観で知られている。我々は当地区内に残存する武士住宅関係遺構の実測調査を行った。

今回の調査概要

上記の調査を行った結果、世に喧伝されている堀内地区内の建築遺構よりも、住宅史的な価値判断からすればむしろ堀内以外の川内地のほぼ全域に分布する中小武士・町屋の方が注目に値することが判明した。

我々の調査研究は次のような段階を経て進められた。

1) 昭和50年10・11月(7日間・参加者5名)・昭和51年3月(5日間・参加者4名)。堀内を除く川内地区全域に存在する全ての建造物の悉皆調査。すなわち建物個々について、建物外部からの観察および若干の聞き取り調査にもとづいて推定建築年代別に次の4種類に分類し、色分け地図を作成した。

- イ) 藩政期の建物
- ロ) 明治～大正期の建物
- ハ) 昭和期の建物
- ニ) 戦後の新建材を使用した建物

こうした分類作業は厳密な意味での建築年代による分類にはなりにくい。やはり武士住宅・町屋それぞれのもつ

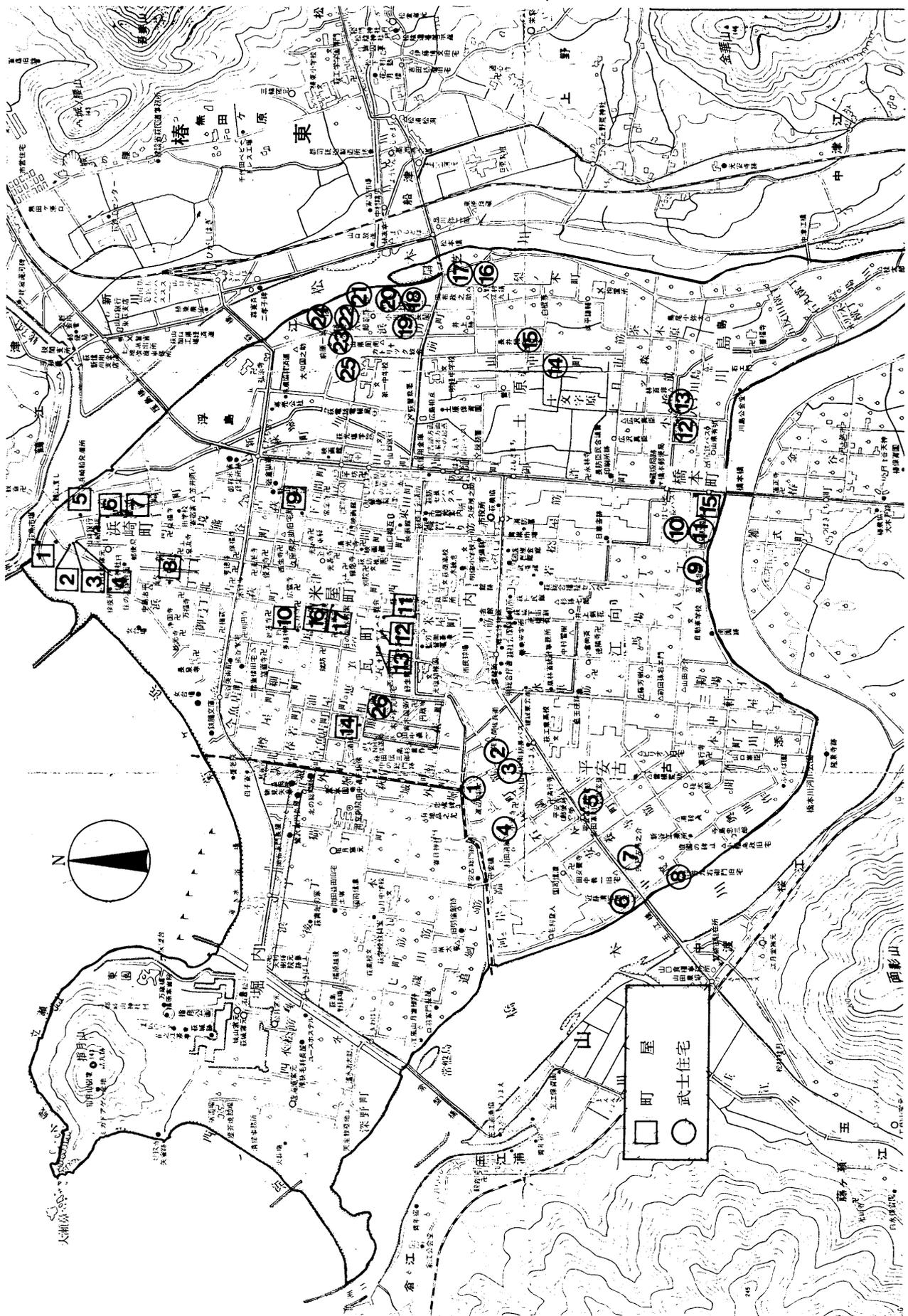
建築様式による推定も加味しながら作業を進めることになる。たとえば武士住宅については、明治時代は云うに及ばず昭和に入ってから、藩政時代の武士住宅とほとんど区別が付きにくい程の類似性をもつ。この場合には聞き取り調査がとくに有効性を発揮した。それに対して町屋の場合には、外部からの観察によってかなりの精度をもって建築年代を推定することが可能であった。とくに2階のつくり方に時代の変化が認められる。すなわち明治時代後期以降には、町屋の2階がきわだって高くなるという傾向が生ずる。それとともに2階の雨仕舞にガラス窓が入るようになる。町屋の場合、その通りに面する正面は看板類によって遮蔽されることが多く、その本体の構造・意匠の確認が付きにくいという不便もあった。

以上のような作業経過の後に完成した、建築年代別の色分け地図によると、川内地区における藩政時代もしくは建築様式的にみてほぼ同じ類型が継承される明治中期までの建築の残存率がかなり高いことが判明する。前に記したように上級武士住宅のほとんど全てが姿を消しているという面はあるものの、中小武士住宅に関する限り、この萩ほど多数の実例が残存する城下町は他に例がない、と云ってよいだろう。

2) 昭和51年7・8月(14日間・参加者7名)。上記の地図にもとづいて、住宅史的研究に着手した。武士住宅と町屋とは、その建築的特性の相違から云っても当然のことながら、調査の目的と内容を異にする。調査対象として武士住宅26件・町屋17件(うち1件は町長屋である)を選んだ。選択については、建築当初の姿をよく残すもの・住宅形式の時代的変遷の資料となるものという規準を設定した。調査家屋の分布は次頁に示す通りである。武士住宅については、平安古・江向・土原・川島の各地区、町屋については、浜崎町・米屋町・瓦町の各地区にほぼ集中している。

イ) 武士住宅の場合

中小武士住宅は、近現代における一戸建て和風住宅の祖形である、という作業仮説を証明するため、そしてこうした作業は実例の豊富な萩が最適地であるという条件のため、中小武士住宅ならびにその範疇に属する住宅の



調査家屋分布地図

実態調査例を多くした。また、主屋はすでに消滅しているか、あるいは建て変えられてしまっても、長屋門・長屋・門などを残す例もあり、それも調査対象とした。長屋門・長屋は陪臣・中間などの住宅として、十分に城下町における住宅史研究の資料となるものであり、また門という機能に注目するならば、武士階級に当然適用されていたであろう、祿高・格式と門構えの形式の関連という興味深い研究テーマになり得るのである。小なりといえども、武士住宅たるもの、門を構え、玄関・取り次ぎの間・次の間そして床の間を備えた座敷に連なる空間

構成をもつ。この点では例外がないというのも興味深いことである。また建築的に一番の見せ所となる床の間まわりについても、格式に応じて、床の間・違い棚と天袋（地袋も）つきの床脇・付書院→床の間・天袋つき床脇→床の間といった変化が認められる。

門については、長屋の中央部に門を関く長屋門（格式によって桁行間数に大小がある）→長屋の一端に門を組み込む形式→門（棟門形式）と長屋を別棟ながら並べる形式→棟門（その間口の広さにも差がある）のみ、という違いが認められる。

調査家屋一覧表（武士住宅）

No	氏名	所在地	調査対象	藩政末期における所有関係	階層	祿高
1	山根 菫	平安古東区308	主屋	町人抱		
2	井上 栄一	〃 東区293の1	主屋・長屋・門	佐藤権兵衛	大組	130石
3	平野 武夫	〃 東区292の1	主屋・長屋・門	国司吉右エ門	〃	426石5升7合
4	上利 宗太	〃 東区	長屋門	村田織部	〃	161石
5	岡 多喜男	〃 東区2の53	主屋・長屋門	竹田純朴	御手廻組	51石8斗5升
6	重富 三束	〃 西区松原121	主屋	嶋尾五郎右エ門	大組	366石
7	田中 誠	〃 203	主屋	宍戸九郎兵衛	〃	120石
8	林 良雄	〃 160	主屋・長屋門	坪井九右エ門	〃	157石5斗
9	加木 源一	江向1区11	主屋・門	高嶋良台	本道道三流	47石5斗
10	山本市太郎	〃 20	長屋門（立面のみ）	北条小三郎	大組	64石
11	渡辺 世祐	〃 5	長屋門（立面のみ）	熊野玄機	本道道三流	107石5斗
12	堀 啓一	川島 338	主屋・離れ	（明治前期の建築）		
13	福原 正道	〃 3区306	主屋・長屋門	佐 助	十三組	5石
14	中島 俊明	土原 27	主屋・門	（明治前期の武士住宅的農家建築）		
15	杉山 繁蔵	〃 1区	主屋・門	桜井平右エ門	大組	64石6斗6升7合
16	奥平 忠	〃 2区228	長屋門	奥平市太郎	〃	300石
17	吉屋 信雄	〃 11	長屋			
18	小川 佳三	〃 3区298	主屋・長屋門	小川勝兵衛	大組	210石
19	秦 官三	〃 3区301	主屋・門	国司武之進	〃	200石
20	入江 吾郎吉	〃 314	門	井上采女	〃	297石6斗4升6合
21	創価学会萩会館	〃 3区306	主屋	（明治前期の建築）		
22	檜崎弥八郎旧宅	〃	門	檜崎寛治	大組	100石
23	油谷 誠一郎	〃 3区320の1	長屋・門	幸坂弥八郎	〃	49石
24	前原 彦八	〃 315	主屋	福間舍人	〃	825石4斗3升9合
25	谷村 種	〃 3区345	長屋門（立面のみ）	栗屋衛蔵	〃	50石
26	木戸孝允 旧宅	呉服町2の37	主屋	和田昌景	外科高村流兼眼科吉岡流	20石

注 藩政末期における所有関係については、「萩城下町地図（嘉永年間）」を、階層・祿高については「嘉永改正萩藩分限帳」を参照した。

No.4は村田清風旧宅、なお、No.5の岡家は久坂玄瑞旧宅、No.6の重富家は近藤清石旧宅、No.15の杉山家は長井雅楽旧宅、No.24の前原家は前原一誠旧宅である。

この一覧表の藩政末期における所有関係というのは、「萩城下町地図（嘉永4～5年）」（萩郷土文化研究会

編）と現在地を照らし合わせ、嘉永年間には誰の所有であったかを調べたものである。そのため、久坂玄瑞旧宅

である岡家は竹田純朴の所有に、近藤清石旧宅である重富家は嶋尾五郎右エ門の所有に、長井雅楽旧宅である杉山家は桜井平右エ門の所有にそれぞれなっている。さらに所有関係の移動のよくわかる一例として、前原一誠旧宅の場合を取り上げて説明しよう。

前原家は嘉永年間には福間舎人の所有であったが、その後前原一誠が移り住んだものである。なお、前原一誠の父、佐世彦七の祿高は47石5斗にすぎないが、福間舎人は825石4斗3升9合である。前原家の家人の話によると、一誠の祿高は600石であったそうで、祿が増えたためそれに見合う規模の屋敷に移ったものと思われる。なお、宅地の面積は祿高に比例し、万治4年における宅地標準規模は次のようであった。

高 3,000石以下	900坪
高 1,500石以下	600坪
高 450石	400坪
高 150石	200坪
徒士三十人通 (25石以下)	120坪
陣僧・弓鉄砲足輕以下	70坪

ロ) 町屋の場合

萩城下における町屋の敷地条件は、ほぼ城下町建設当

初の江戸時代初期に定められたと云ってよいようだ。とくに特筆すべきような大災害もなく時間の経過した町屋地区では、店間口の拡張は隣家の買収以外には不可能である。また店先への拡張行為も、道路側溝が城下建設のかなり早い時期に計画され、堅固な玄武岩で出来上ったのちには不可能事であった。このような町屋地区での建築行為の幾分かは、正面意匠にみられる若干の変化(出格子・虫籠窓・戸という雨仕舞に関するもの、外壁の真壁造・塗り込め造といった防火性能に関するもの)に表出するほかは、床の間と土庇そして内庭と連なる空間の質的向上に向けられていたのである。こうした傾向は、萩城下の町屋にのみ認められる特性ではなく、封建制度下においては全国的に共通したものである。

次に室内の意匠に若干触れておこう。面皮つきの床柱と落し掛け、同じく面皮から派生したと見られる大面取りの長押など、座敷まわりの意匠には多分に数寄屋造風な好みが見られる。町屋と武士住宅の建物外観の相違は歴然としていることは勿論であるが、このような室内意匠あるいは、上記の土庇の存在、庭におかれた手水鉢や石燈籠に至るまで、両者の間にはほとんど差異は認められない。藩政期においては、幾分控え目であるが、身分的制約の撤廃された明治維新以降になると、町屋の座敷飾りは上級武士住宅のそれを上まわる程の豪勢さを示すようになる(たとえば写真7)。

調査家屋一覧表(町屋)

No	居住者氏名 (敬称略)	所在地	建築年代	間口間数 (単位:間)	外観の特色			
					1階	2階	2階の高さ	その他
1	藤井政一	浜崎町4区178	江戸~明治	3.5+3+3.5	蔀・格子・大戸		低	
2	斉藤五郎作	" 4区184	明治2年	3.5(+2.5)	格子		低	
3	馬庭誠式	" 4区185	江戸末期	7	格子・蔀	格子	低	3つの切妻破風
4	松浦誠之進	" 4区186	明治初期	3.5(+2)	格子・蔀	むしこ	低	
5	橋本フサ	" 3区1	明治初期	3	格子	もと格子	高	
6	山村次郎	" 77	江戸末期	7.5	格子 (倉のなまこ壁)		低	
7	竹内八郎	" 2区76	明治8,9年	6(+2.5)	格子	むしこ	低	
8	三浦四郎	浜崎新町118	明治後期	6(+3)	格子	雨戸	中間	
9	松本喜一	今古萩町54	昭和2年	6.5	格子・独立柱	ガラス戸	高	
10	宮原富美子	塩屋町30	明治前期	4.5(+5.5)	格子・独立柱	むしこ	低	
11	住永明介	瓦町35	江戸末期	4(+3)		大きなむしこ なまこ壁	低	
12	榎田千之	瓦町39	江戸末期	6			低	
13	都野守良雄	瓦町46	明治前期	4.5	格子	格子	高	
14	久保田拓造	呉服町1-31	江戸末期	5	格子・独立柱	むしこ	低	
15	増山史朗	橋本町510	江戸末期	6.5(+3)	格子・独立柱 駒つなぎ	むしこ	低	入母屋屋根
16	末益武夫	米屋町67	明治前期	4		むしこ	低	
17	森田栄	" 64	江戸	5.5	町長屋		低	
	山口屋幸彦	" 65		6.5				
	斉藤博敬	" 66		4				

注1 藤井家は隣合った3軒を改築して1軒としている。

注2 間口間数で、カッコ内は塀・門・倉の部分である。

研究目的の所在

萩は近世城下町の系譜をひく都市のなかでも、とくに伝統的景観をよく残すところとして知られている。しかし従来の話題はあくまでも景観、すなわち道路からの外観の質をとり上げるという段階に止まっていたにすぎない。けれども現時点での萩の価値は、さらに多面的な研究視点から再評価されるべきものがある。たとえば我々のテーマとするところの都市集住様式という側面からの住宅史的研究である。従来の我が国における住宅史研究をふりかえってみると、我々は近世城下町における住居形式（武士住宅と町屋）に関する実態資料があまりにも不足していることに気付かざるを得ない。それは従来の農村民俗学の蓄積の厚さに対して、都市民俗学とでも云うべき学問分野の欠落とも関連するだろう。もうひとつの例証として現在の重要文化財指定民家の種別棟数を挙げておこう。農家 265 棟・町屋 79 棟・宿場建築 44 棟・漁家 6 棟・武士住宅その他 60 棟（昭和 51 年 12 月現在。この数字は主屋・門・倉をそれぞれ 1 棟として数えたもの）。このなかでとくに武士住宅その他、という項目に注目されたい。その他のなかには社家・郷士・遊廊などが含まれており、城下町の武士住宅と称すべき主屋部分の指定は僅かに 2 棟にすぎない。農家の指定棟数と比較した場合、これは驚くべき数字である。こうした民家の文化財指定の根拠は、昭和 41 年度より現在まで継続中の各都道府県民家緊急調査である。指定の際には、建築年代の古いこと・建築意匠および技術が優れていること・地方的特色が濃厚であること・建築当初の姿をよく残していることなどが考慮される。これらの諸点は、いずれも武士住宅にとって不利な条件ばかりである。このような文化財指定の理由づけは、民家緊急調査の際の調査対象家屋の選択にも多大の影響を及ぼしている。全国各城下町には未発掘の中小武士住宅がかなり点在していることは容易に予想できるところである。農家・町屋のなかには、江戸時代初期のものが数棟あるのに対して、武士住宅は古くても江戸時代中期、大部分は江戸時代後期に属する。その最大の理由は、使用を許される木材の質が抑えられていたことによるだろう。意匠・技術の面でも制約がある。次に地方色という点については、全国各城下町の武士住宅の間には本質的な差はなかった、と云ってよい。近世封建制度に則した住宅という側面、あるいは国替え、所替えという形での人的移動という背景で考えれば、これはある程度の必然性をもつと云える。農家建築が風土性に富むことに比較すれば、この点はとくに注目すべきであろう。最後の改造が少いという点についても武士住宅には特異な性格がある。いくつもの部屋が複雑に配置され、付属施設（風呂・便所など）は下屋状に付加される。すなわち構造的にみると、どの部分

が主体構造でどこが付け加えられた構造なのか、判然としない。こうした構造は、農家・町屋のそれとかなり異なったものと云うことができる。（写真 3 および写真 8 参照）。

以上に述べてきた主旨は、武士住宅の我が国住宅史研究上に占める位置に触れることにあったが、このような事態になった理由の一端として次の点を指摘すべきであろう。それは近世武士住宅、とくに中小武士住宅が、現在では目立たない存在になった、ということである。明治以降の住宅建築は、近世中小武士住宅の様式に則したものだ、とする重要な指摘がある。小さいながらも一戸建てで、門・玄関を設け、客座敷には床の間がある。この点では現代和風住宅と中小武士住宅はまったく相通するものである。材質の新旧・相異を別にすれば、この両者の間には類似点が多く認められる。本質的にそれは俵給生活者の住宅なのである。近世と現代の農家経営の違い・近世町屋と近代商店の違いと比べた場合、その特性はさらに明確になるであろう。

<研究担当者>

石井 昭	東京都立大学	工学部	助教助
一色 史彦	"	"	講師
羽生 修二	"	"	大学院生
石井 邦彦	"	"	学部生
南 直行	"	"	"
山田 幸正	"	"	"
宮田 浩	"	"	"

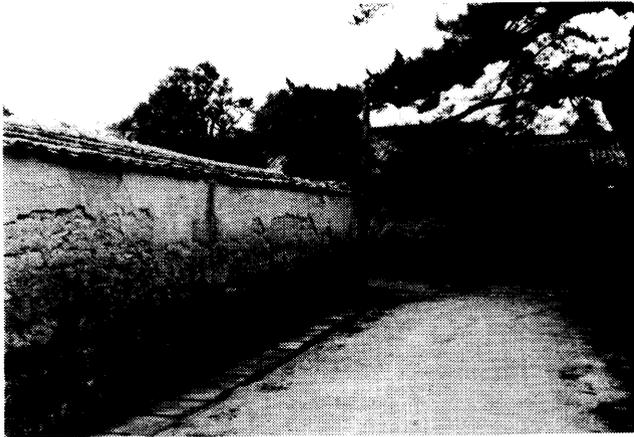


写真1) 平安古の保存地区の景観

ここは重要伝統的建造物群の指定地区で、土塀・長屋門などがよく残っている。鍵の手の部分では視界が閉ざされ、歴史的な雰囲気を感じることができる。

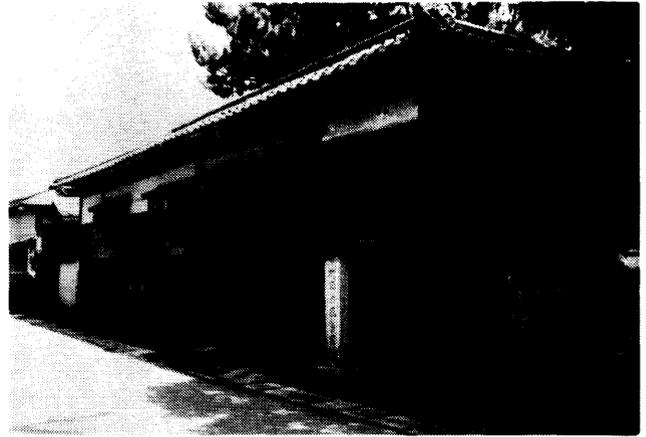


写真2) 村田清風旧宅長屋門外観

村田清風は江戸末期に藩政を改革した人で、この建物は史跡として指定されている。長屋門としては比較的小型であるが、寄棟の整った外観をもっている。



写真3) 前原一誠旧宅外観

武家住宅の主屋のプランは自由に作られ、不規則な形になる。屋根もそれに従って複雑なものが多いが、大きく葺きおろすことを原則としているようである。



写真4) 福原氏宅内部

これは中小武士住宅の典型例で、床の間は一間、違棚はない。左手奥は茶室になっている。面皮つきの床柱と落し掛け、大面取の長押など数寄屋風の造りである。

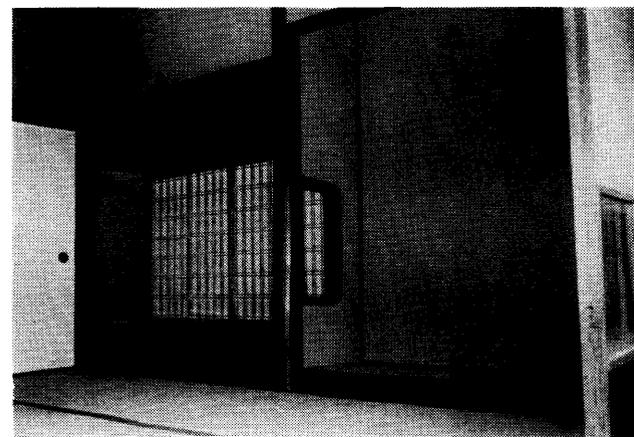


写真5) 木戸孝允旧宅内部

孝允の実家は、藩医だった和田昌景宅である。床の間の左に付書院兼用の床脇が設けられる点に4)の例よりも高い格式が表現されている。ここでも大面取の長押が打たれる。



写真6) 宮原氏宅 土庇・庭

床のある主室には、広縁がつき、深い土庇がかけられる。このような空間構成は武士住宅・町屋に共通したものである。手水鉢・燈籠に秀作が多いのも萩の特色である。

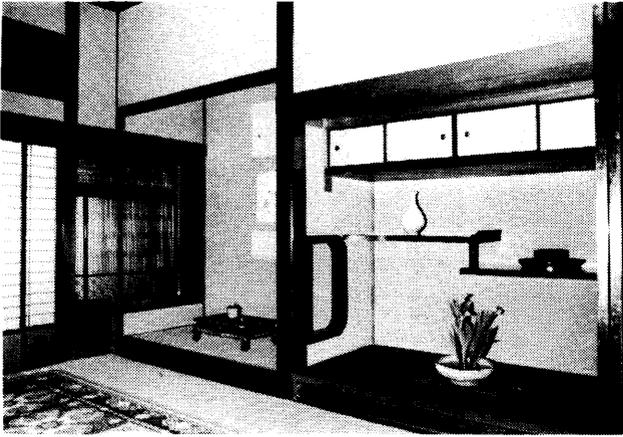


写真7) 宮原氏宅内部

この町屋は、明治の建物である。財力のあるものは、藩政期では上級武士にしか許されなかった、床の間・付書院・違棚などを構えるようになった。



写真8) 増山氏宅外観

酒屋には大きな町屋が多い。御成道に面して入母屋の屋根・漆喰塗の壁・むしこ窓が美しい。左の格子の前に駒つなぎが見える。藩政末期の建築。

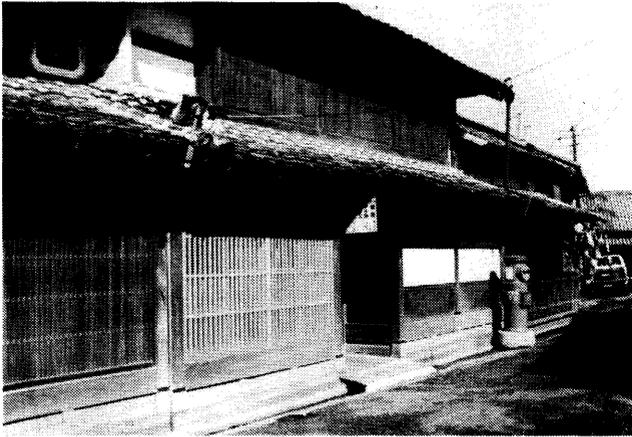


写真9) 馬庭氏宅外観

格子と蔀で構成された外観。左手のむしこ窓は隣家の松浦氏宅である。この浜崎町一帯の町屋は漁業関係者が多いため、格子などの手入れが行き届いている。



写真10) 橋本氏宅外観

明治初期の建物。藩政期のものと比べて、二階が高くなり、居室として使用される。外観には改造があり、一階はもと蔀・二階は出格子であった。

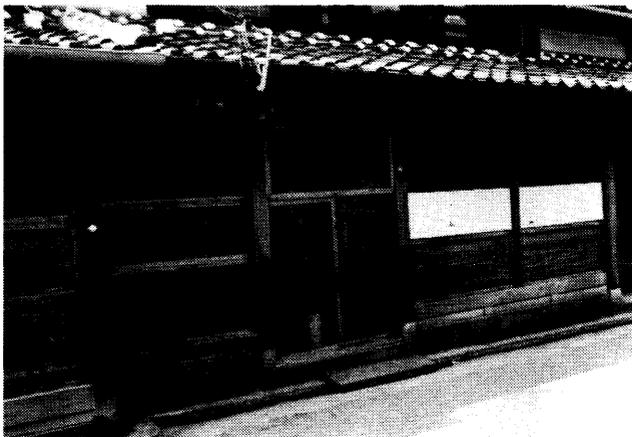
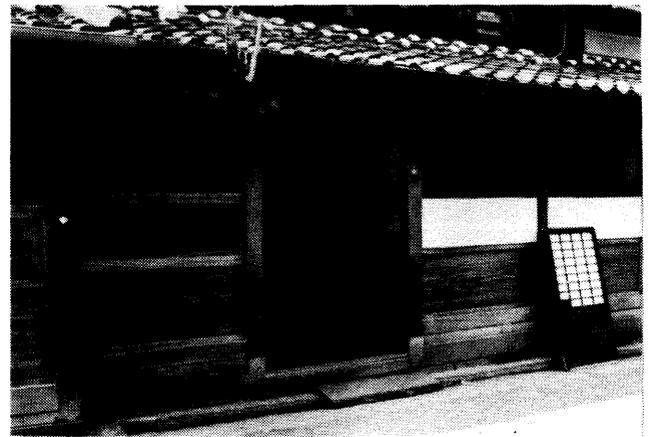
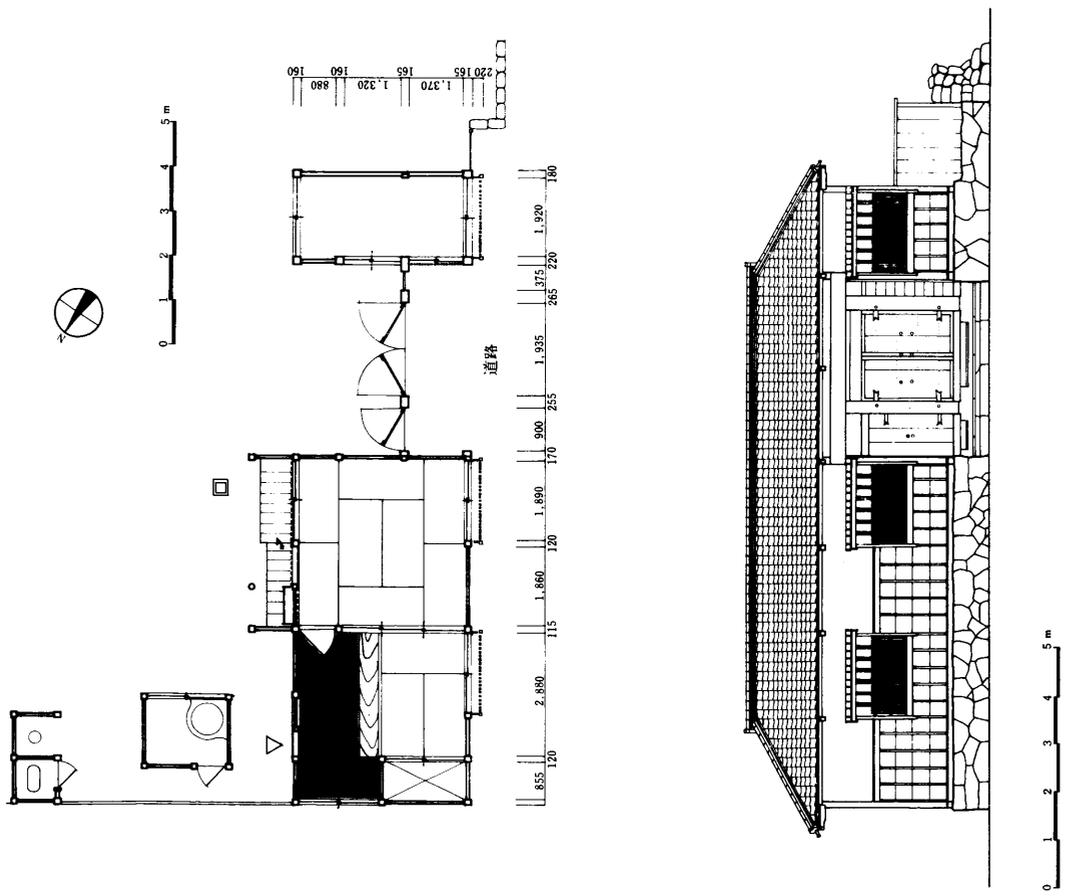


写真11) と 12) 藤井氏宅外観

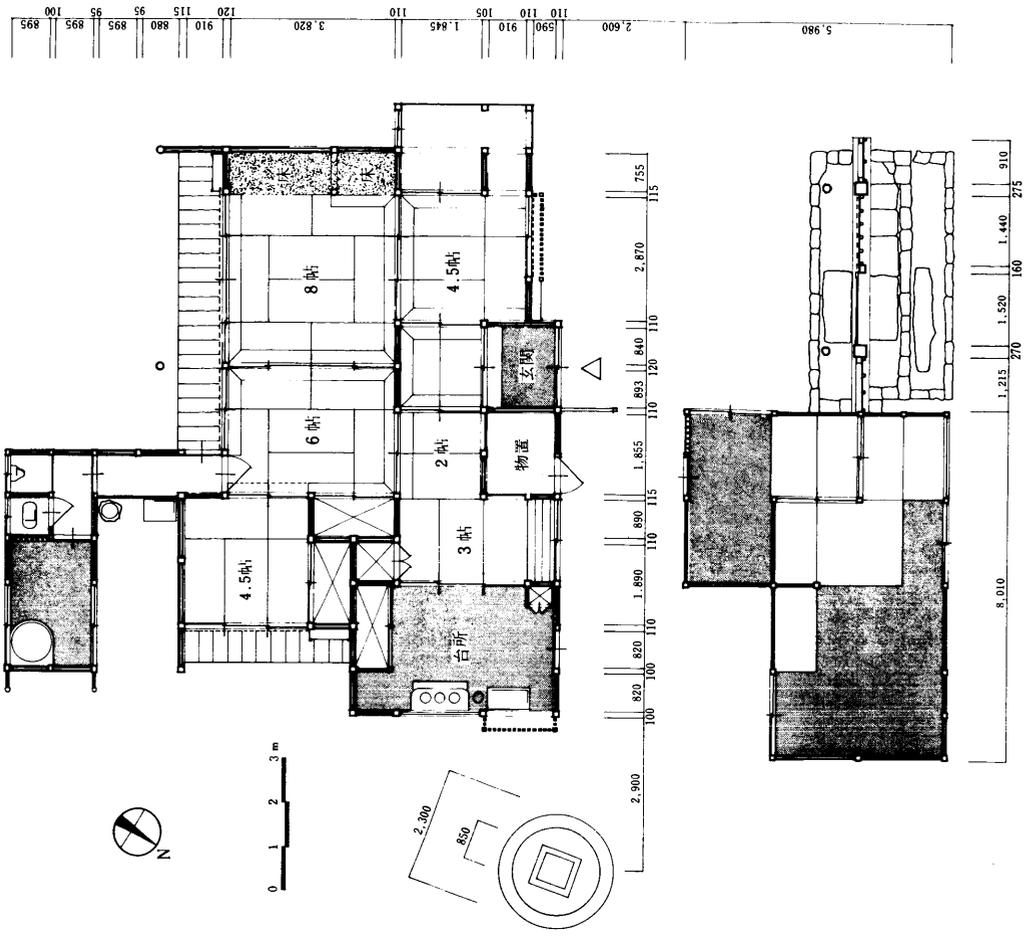
浜崎町の町屋の特色の一つである蔀がきれいに残っている。蔀は普通3枚から成り、上部の一枚は内部にはね上げ、金具で止める。あとの2枚は溝からはずし、板蔀と障子蔀を入れかえたり、中央の方立をとれば2間分全面を開放したりすることので



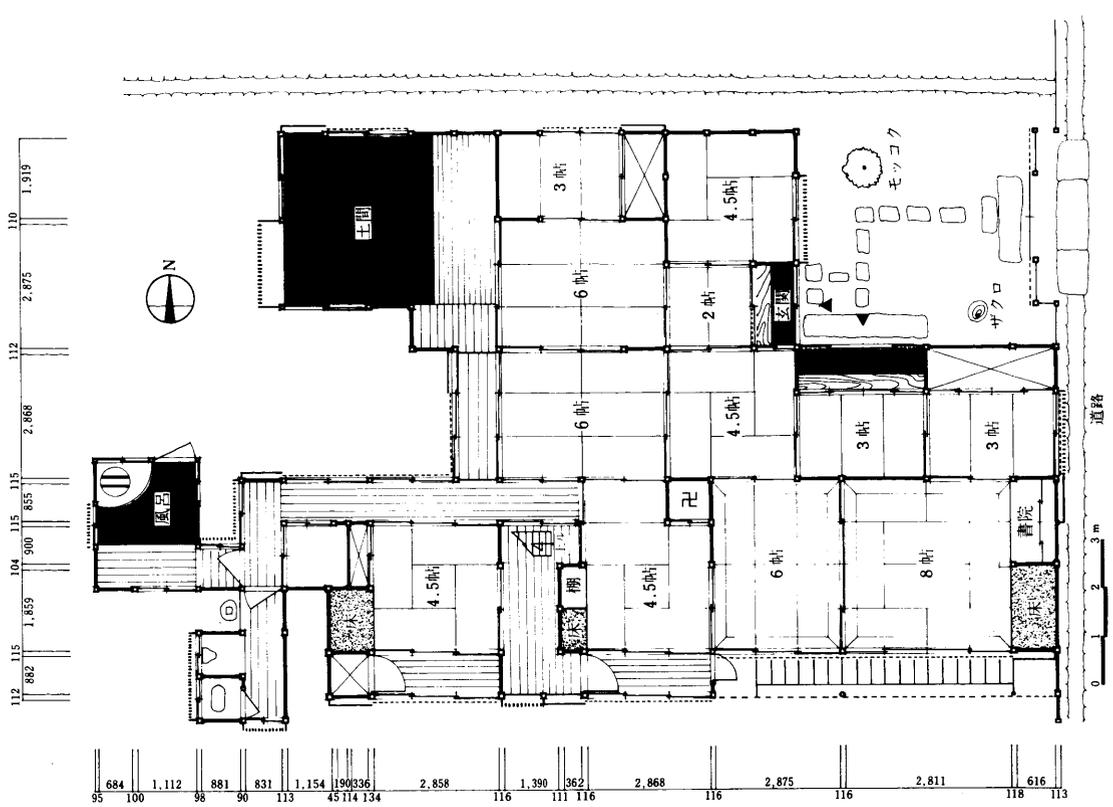
きる便利な建具である。中央の出入口を引違戸をはずし、上の板をはね上げられる。夜は蔀により閉鎖できるにもかかわらず、簡単に柱だけのオープンなファサードをつくることのできる。蔀の簡素な構成と、板の木目が美しい。



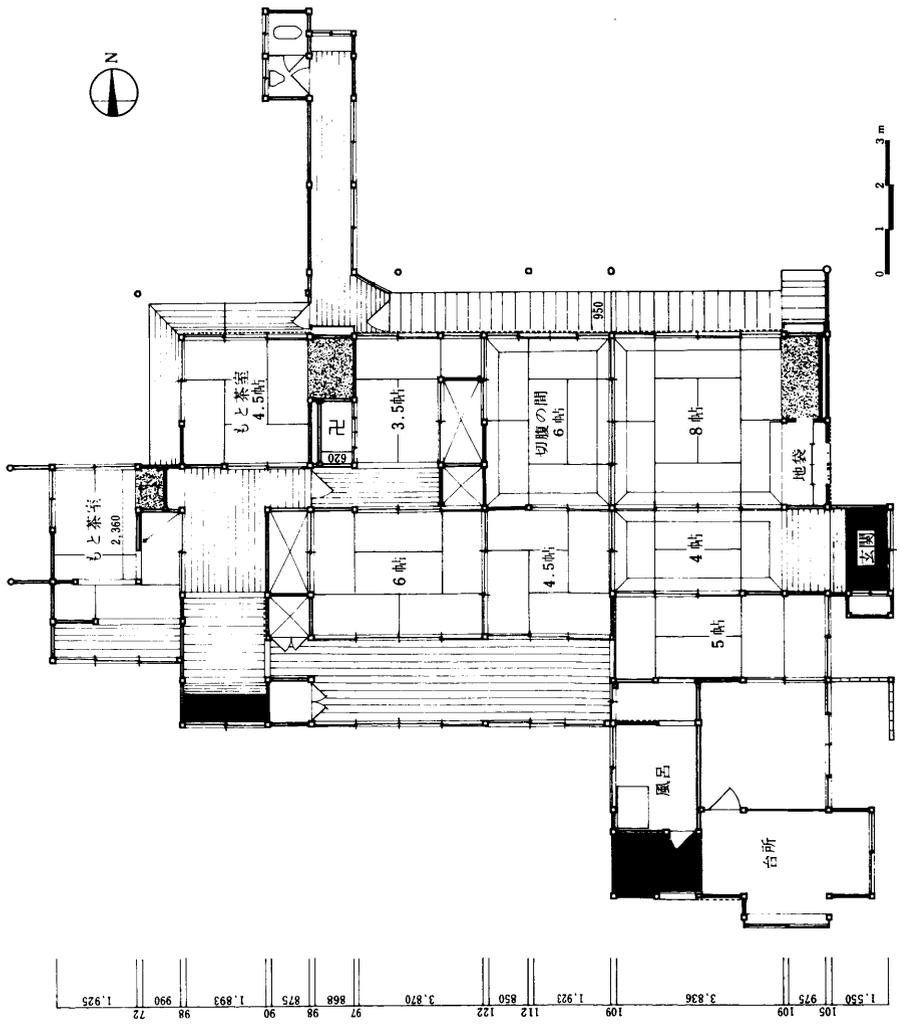
▲ 上図 村田清風旧宅長屋門平面図
下図 立面図



▲ 井上氏宅平面図

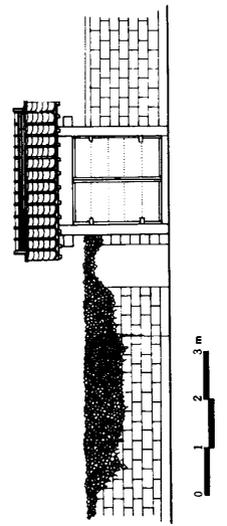


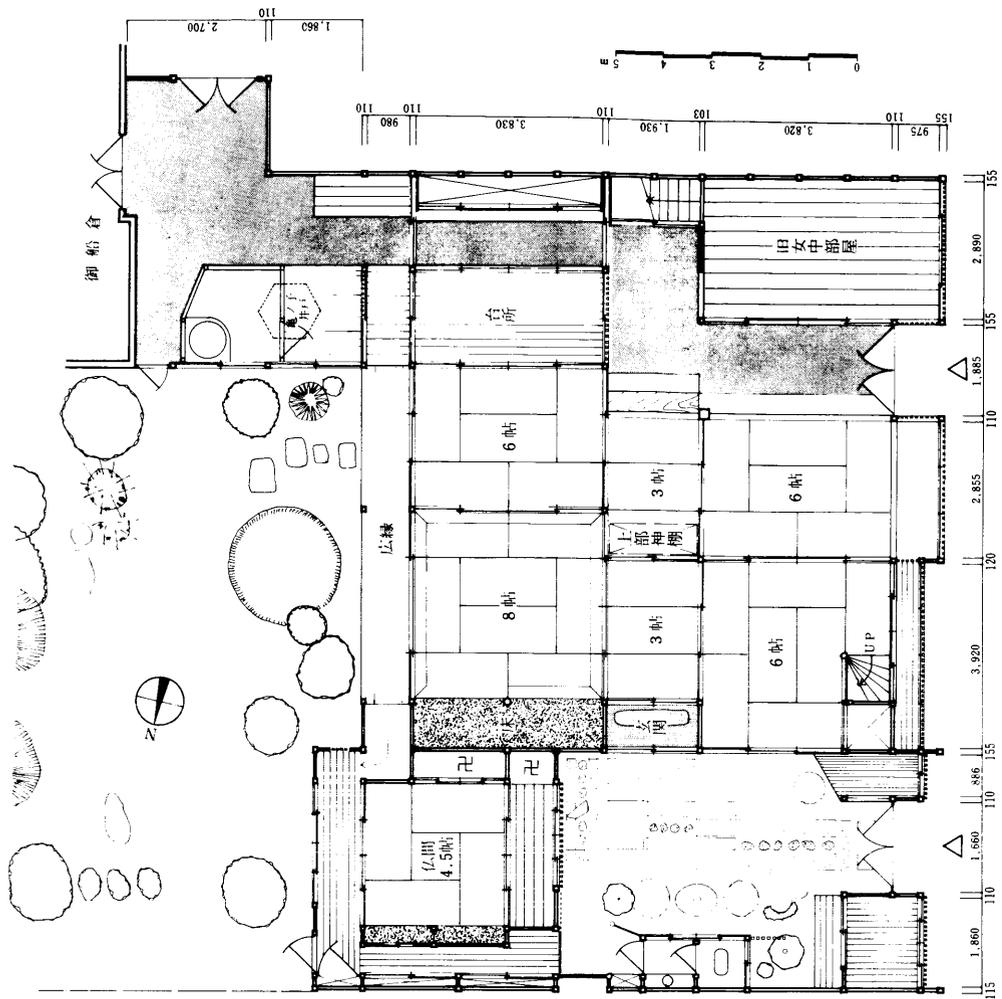
▲ 木戸孝允旧宅平面図



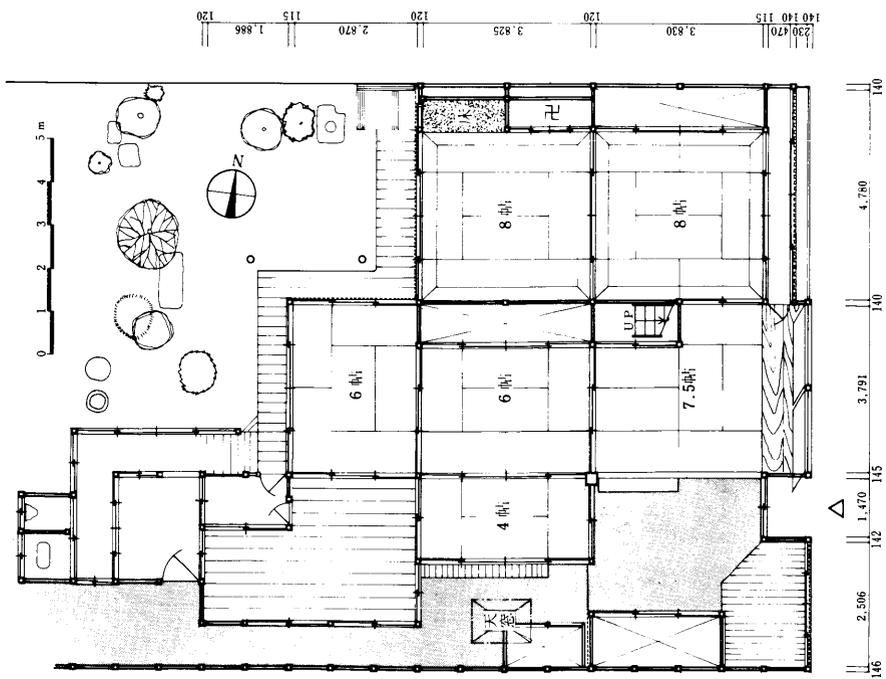
▲ 上図 秦氏宅平面図

▲ 左図 秦氏宅門立面図

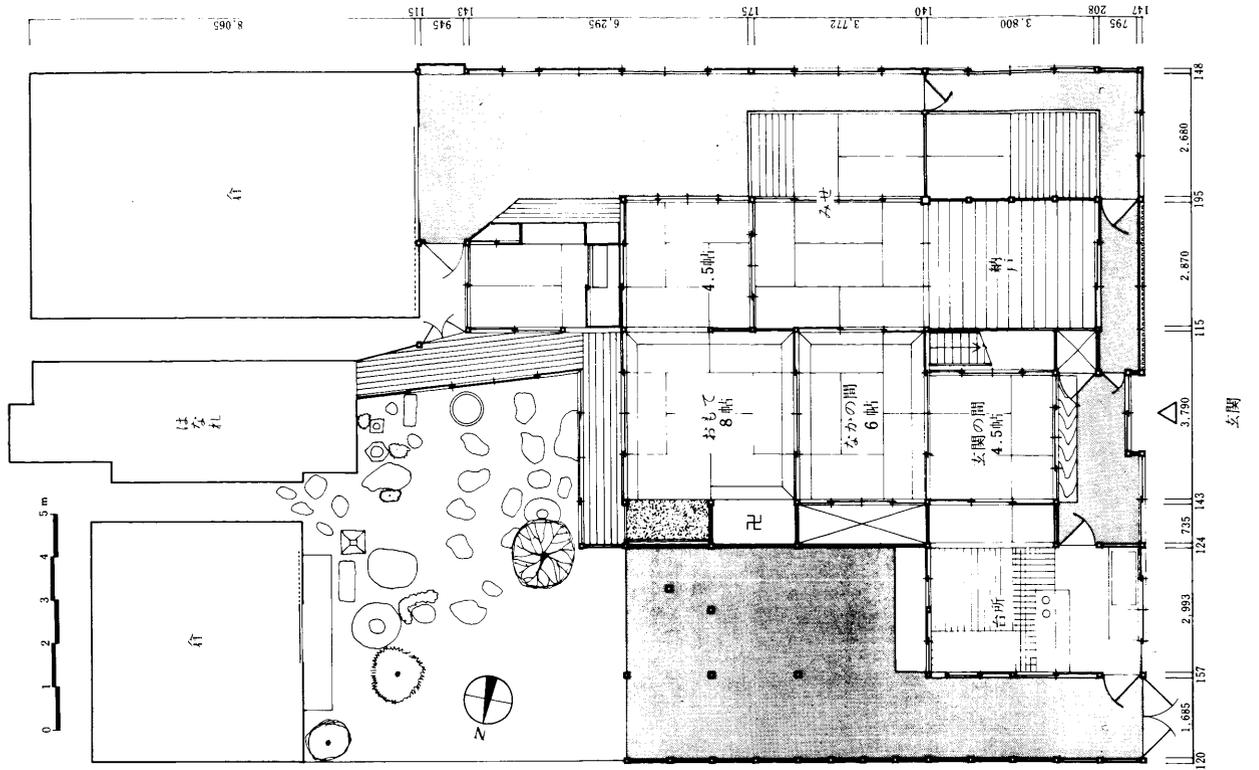




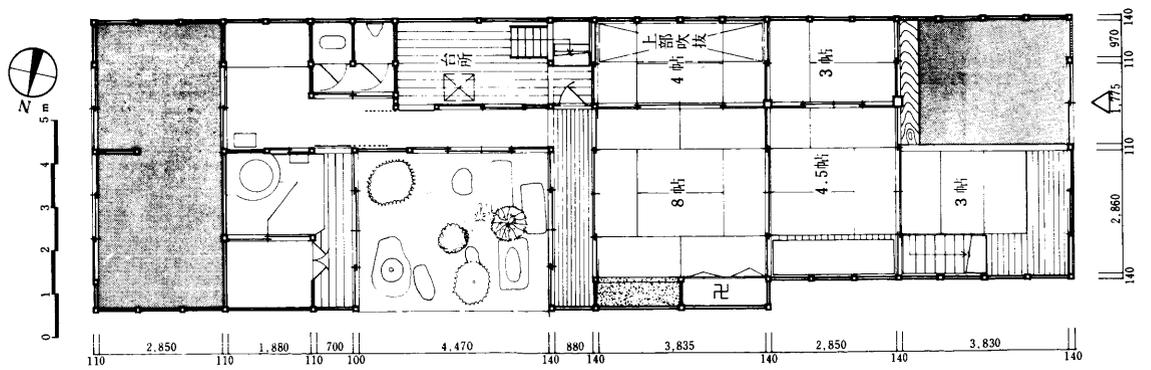
▲竹内氏宅 平面図



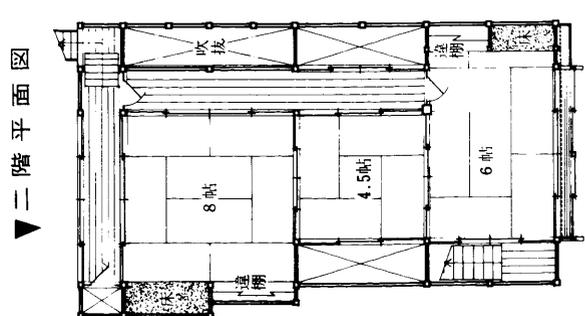
▲馬庭氏宅 平面図



▲ 山村氏宅 平面図



橋本氏宅
一階平面図 ▲



▼ 二階平面図